

当院で分離された緑膿菌に対するカルバペネム系抗菌薬の MIC 分布と感受性率の推移

天理よろづ相談所病院 臨床病理部 感染症検査室

○松谷日路子 中村彰宏 阿部教行 福田砂織

中野佐多子 藤本宜子 河野久 山本慶和 松尾収二

【はじめに】

カルバペネム系抗菌薬は、最も強力な薬剤であり、カルバペネム系に耐性の菌は治療に難治すると思われる。当院では 2007 年より新規に Doripenem (DRPM) を追加し、ますます使用率が増え耐性菌が増加する恐れがある。

そこで今回耐性菌の多い緑膿菌におけるカルバペネム系抗菌薬 4 薬剤の感受性状況を調査した。

【対象】

2005 年 1 月 1 日～2009 年 9 月 31 日までに当院で緑膿菌が分離され、感受性試験を行った 667 症例。(尿検体は除外) 内訳は、2005 年 182 症例、2006 年 134 症例、2007 年 115 症例、2008 年 128 症例、2009 年 108 症例 (2009 年に関しては 1～9 月)。1 ヶ月以内の同一材料から分離したものは除外した。

【使用薬剤】

Imipenem(IPM)、Meropenem(MEPM)、Biapenem(BIPM)、Doripenem(DRPM)

【方法】

- 1.各種薬剤について MIC の分布と感受性率の比較(ブレイクポイントは、IPM 2 μ g/ml、MEPM 2 μ g/ml、BIPM 2 μ g/ml、DRPM 1 μ g/ml とした)を行った。
- 2.緑膿菌の各種薬剤感受性率の年度別推移をみた。

【結果及び考察】

1.MIC50、90 の比較は DRPM (0.25/4 μ g/ml)、MEPM (0.5/>4)、BIPM (0.5/>4)、IPM (1/>4) であった。感受性率は DRPM (82%)、BIPM (82)、MEPM (76.8)、IPM (75.4)であった。(表 1) DRPM の感受性が一番良好であった。

表 1.各薬剤の MIC50,MIC90 及び感受性率

	MIC50 (μ g/ml)	MIC90 (μ g/ml)	感受性率 (%)
IPM	1	>4	75
MEPM	0.5	>4	77
BIPM	0.5	>4	82
DRPM	0.25	4	82

2.感受性率は 2006 年が最も低く以後上昇した。(図 1) この要因は、入院症例における緑膿菌の検出の減少と、ICT (Infection Control Team) によるカルバペネム系抗菌薬使用の注意喚起等が考えられた。入院の緑膿菌の感受性率は外来に比べ低く、この入院の減少が感受性率を高くしたと考えた。また入院平均日数が 2006 年は 18.9 日であったのが 2009 年は 14.0 日と短縮し、薬剤耐性の緑膿菌の検出数の減少も感受性率を高くした要因と考えられた。

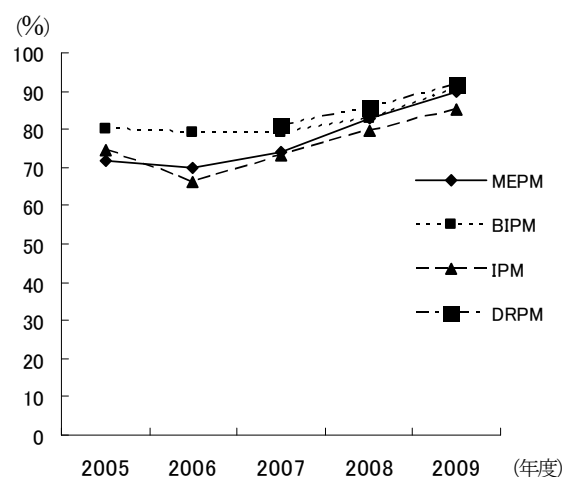


図 1. 年度別緑膿菌の各種薬剤感受性率の推移

【まとめ】

カルバペネム系抗菌薬の注意喚起と入院日数の減少が緑膿菌の感受性の上昇に関与したと考えられた。

